

小さいなぎっかけだった。日川高入学後、親しい友人がラグビー部に入ったことから「おれも」。その小さな決断が人生を左右した。「スポーツは全般的に好きだったが、自分が捨てて石になってもチームの勝利に貢献するラグビーが、結果的に自分の性分に合ったのだらう」と振り返る。

高校3年時でも身長170センチ弱、体重60kg以下。ラグビー選手として決して体は大きくなかったが、1年からバックスのセンターを務めた。同期には後に日本代表や世界選抜にも選ばれた藤原優選手がいて、2、3年時には花園でベスト4入り。3年時の全国大会準々決勝・国学院久我山(東京)戦では後半、18点差を逆転する名勝負を演じた。

「日川が走るラグビーだったからレギュラーに

帝京大ラグビー部の基礎をつくった同大医療技術学部准教授

水上 茂さん

東京発 元氣甲子園



みずかみ・しげるさん 山梨市(旧牧丘町)出身。日川高、早稲田大卒。1978年から9年間、帝京大ラグビー部コーチ、監督を務めた。92年から現職。東京都八王子市在住。55歳。

個性見つめ選手指導

分の中で自信をけに感慨深い」としなが持てる成果がほらも、「現在のチームに口を出すことはない。その時々監督がチームをつくればいいことだから」。今は東大ラグビー部のOBらでつくるクラブチームのコーチを務める。「ラグビーそのものを楽しむようになったかもしれない。練習後に酒を飲みながら選手と話すのも楽しみ」と笑顔を見せる。

なれた。体が小さいので、相手とぶつからないため、また新興勢力の1校に過のステップと、人を生かすパスを徹底的に練習した。指導者になってもその原型は変わらなかつた。

大学卒業後は大手広告代理店に就職したが、先輩の誘いで2年後には帝京大ラグビー部コーチに就任。シャージャの色から後に「赤い旋風」と呼ぶ

帝京大ではアスレチックトレーナーなどを指導する学生に「指導者論」を教える。基本は日本体育協会がまとめた教本だが、「選手一人一人は一律で図れない。現場では本の理論と違つこともあるといふことを頭に入れてなければいけない」。自身の経験談を交えながら、個性を見つめる視線の必要性を教壇で訴える。

〈藤原 祐紀〉